

「中村桂子×エマニュエル・ムホー展 色層／shikiso：呼応する色たち」

中村 桂子

NAKAMURA Keiko

エマニュエル ムホー

EMMANUELLE Moureaux

和田 菜穂子

WADA Nahoko

色を巡る 中村 桂子 (NAKAMURA Keiko)

2009年7月23日より8月7日まで、本学本館7階ギャラリーにおいて、「中村桂子×エマニュエル・ムホー展 色層／shikiso：呼応する色たち」と題する展覧会を行なった。

これは、美術館大学センター主催による芸術学部教員（中村桂子：美術科版画コース）とデザイン工学部教員（エマニュエル・ムホー：プロダクトデザイン学科）のコラボレーション展『TUAD mixing』の第一弾として企画されたものである。

この「色層／shikiso：呼応する色たち」というサブタイトルは、本展のキュレーターである和田菜穂子氏（美術館大学センター学芸員・教育教養センター教員）によって提案されたものだが、ムホー氏の実際の空間を仕切る「面」としての「色」（そのコンセプトは「色切／shikiri」というタイトルが名付けられている）に対して、私の独立した（限定された）平面の中の「空間」としての「色」を対比させるものであった。

初めて日本に降りたその日から、東京の街の溢れる色彩に魅了されたというムホー氏の作品は、色に特定のイメージや印象を付随させるというより、あくまでも機能としての色という性格が強い。

元来デザインと機能は切り離せないものであるが、色は空間のなかで自立し、新しい場を形作る構造そのものも担っている。空間を構築するために質と色が決定され成立へと向かう。

今回の作品は、幅90cm、長さ5mの22色のフェルトを天井より吊るし、回廊状の会場に点在させたもので、場内の一辺ずつに寒色系と暖色系の色の連なりが作られた。それらフェルトの帯の流れは、観客の動線ともなるように構成され、林間地のような大小の流れのとぎれに私の作品を配した。

ムホー氏の意図ではなかったが、会場内の空調のために、かすかな機械の唸りとともに5mのフェルトは絶えず静かに揺れていた。そのわずかな動きについて空間のヴォリュームも微妙に変化し続け、私にはそれが人工的な構造というよりも、もっと単純に身体的な、いわば心音のような印象を抱かせた。色自体が固有の意味を持たないがゆえに、色彩と質の構成によって仕切られ（色切られ）確立された場が、幾重にもなる巨大な色のゆるやかな振動によって、その有機的な事象に対するコンクリートの無機質な壁面、低く流れ続ける機械音、冷気、ブラインドを開け放したギャラリー北側から見えるふくよかな夏の景色、固定された平面のなかの私の作品の揺らぎへと、スパークしあうのではなくむしろ含みあうように動き始めていた。この含みが、アクシデントが、ムホー氏と私の作品の小さな架け橋のひとつになってくれたと思う。

ムホー氏と同様に構造、空間を供出するためのものでありながら、私にとっての色はイリュージョン（幻影）のなかにそれを作るためのものである。そして片に反する版は文字どおり、その制作工程のなかで常に現実と虚構の間を反復する。つまり、背中合わせにいる版（片）そのものは刷られることで反転し姿を消す。現前するのは紙などの支持体とインクや

絵具、それが確かに捺された痕跡だけである。この痕跡に潜むものは描かれた図像だけではない。版材そのものの物質感、版への行為の在り様、時間の経過、印刷時の身体感覚、それら全ての理をも呑み込んでいる。

木版画の場合、必要のない部分は刃物によって削られてゆく。どのような力で、どのような速さで削るのか。どのような条件にして、どのような強さで刷るのか。存在の消失（彫り）と生成（刷り）はその時ありのまま紙に写し取られる。私は一版多刻（一枚の版で彫りと刷りを交互に行う、版を彫り進めながら、同じ紙に刷り重ねてゆく）技法を中心に用いることが多いため、存在の有無を動かしながら、一方で痕跡を積み重ねてゆくと、その動きは生き死にに近く、刷りとられたものはその間の人生の時間や体験、記憶の集積とも考えられる。版画は記録装置でもある、と思う。そこにあるのは叙事であって、叙情ではない。それは、情報伝達のための印刷術を親に持ち、特にその中の書物－文学や詩を乳として育った版画そのものに刷り込まれた在り様なのではないか。

私にとっての色は、その版の道行のなかを探り歩くための懐中電灯や方位磁石であり、測量道具のようなものといえる。色を層として重ねることによって或る生を絵画空間に置き換えること、版というシステムはそのやり取りに必要であり、まだ未知の領域は深い。

異分野の作り手と空間を共有することは差異を認識することであり、自らの位置をまた改めて考えることになる。その関わりのなかでフランス人であるムホー氏が日本で活動することも俎上に上ることであった。複雑に曲がりくねった日本美術史の尾にいる日本人である私が伝統浮世絵木版画の技術を踏襲しながらも、明治期の創作版画運動以来拡大し続けてきた版画の概念のなかで作品を作るとはどういうことなのか、そもそも私の文化背景は何なのか、作家個人として、また若い人にバトンを繋げる現場に居て、考えることは多かった。

会期は終了したが、問い合わせはまだ続いている。

中村桂子×エマニュエル・ムホー展

色層／shikiso：呼応する色たち

2009年7月23日(木)－8月7日(金)

東北芸術工科大学7階ギャラリー

関連企画：

中村桂子×エマニュエル・ムホーによるギャラリートーク「色を重ねる」

司会：和田菜穂子（教養教育センター 学芸員課程 準教授）

2009年7月28日(火)

東北芸術工科大学7階ギャラリー

撮影：

7階ギャラリー会場風景

エマニュエル・ムホー作品 田中 秀樹 永石 秀彦

中村桂子作品 上野 則宏 川上 弘美





